

〈書評〉

Scarlett O'Phelan Godoy, *Rebellions and Revolts
in Eighteenth Century Peru and Upper Peru*
(Cologne: Böhlau Verlag, 1985), pp. xv, 345.

真鍋 周三
(同志社大学)

I はじめに

本書において著者は、18世紀半ば以降のペルー副王領における鉱業（銀の生産）の発展、レパルト [レパルティミエント制。コレヒドール（地方行政官）が管轄区の原住民に物品を強制的に割り当て、その代価を強制徴収する方式] の法制化による生産・輸送・商業部門の著しい進展による経済の活性化を基盤として登場したのがブルボン財政改革であったと主張する。それは、植民地大臣ホセ・デ・ガルベス（在位 1776—1787年）を中心に実行され、新税の創出 [コカ、蒸留酒、穀物に新たにアルカバラ（販売税）を課す]、アルカバラのつり上げ、従来は課税を免除されていた生産物と社会階層に税（特にアルカバラと貢納）の適用を拡張すること、交易路沿いの主要都市に税関を設置して腐敗を抑制しアルカバラを厳格に徴収することなど、を骨子としたものであった。歴史学界への本書の最大の貢献は、トゥパック・アマルの反乱の原因究明の中軸にブルボン改革を据えた点である。これまでの研究におけるブルボン改革の捉え方は断片的であったり、または皮相なものに終始していたと言っても過言ではない。著者は、従来大反乱の主要原因とされてきた貢納、ミタ（賦役）、レパルトとブルボン改革とを並列的に捉えはしない。植民地社会の構造全体を根底から動揺させたものとしてブルボン改革を見据え、このことを反乱の背景として分

析・証明しようとしているのである。

本書では140件にもよる反乱や騒動が紹介あるいは分析されており、これまであまり顧みられなかった18世紀前半の諸反乱もまた射程に入れられる。また空間的にもシエラ南部（中央アンデス南部高地）だけを念頭におくのではない。ペルー副王領全域で起きた抵抗運動の数々をふんだんに盛り込むことで、大反乱に至る全般的危機の到来に具体性と普遍性をもたせようとしているのである。

また本書では第二次資料のみならず、ペルー、スペイン、イギリス等において収集された未刊行の大量の古文書が駆使され、詳細な調査・分析が試みられているほか、合計36の有益な表と図表が挿入されている。

著者スカーレット・オフエラン・ゴドイは著名なアンデス地域史研究者であって、近年、多くの研究論文を発表している。主なものは以下の如くである。

『18世紀ペルー副王領北部における農民反乱の性格』（1978年）/『18世紀トゥパック・アマールと諸反乱』（1976年）/『クスコ，1777年：ウルバンバのマラスの運動』（1977年）/『18世紀の北部と財政政策への抵抗運動』（1977年）/『18世紀末期のアンデス南部，カシケもしくはコレヒドール』（1978年）/『18世紀の北部と反教権主義の反乱』（1979年）/『トゥパック・アマールの反乱：内部構成，指導者，同盟』（1979年）/『トゥパック・アマール主義運動：諸段階，経済的状況，指導者の社会的構成の特徴』（1982年）。

なお本書は、*Un siglo de rebeliones anticoloniales, Perú y Bolivia 1700-1783* (Cuzco: Centro de Estudios Rurales Andinos "Bartolomé de Las Casas", 1988)としてスペイン語にも翻訳されており、世界各地で広く読まれている。

以下では、内容を概要し著者の視点を紹介したあとで若干の問題点を整理し論評したいと思う。

II 本書の構成

まず本書の構成を目次によって示すと、次の如くである。

序 文

第1章 18世紀における生産と財政：植民地経済の全般的状況

第2章 副王カステルフエルテと最初の反乱局面

第3章 レパルトと歩調の乱れた小蜂起

第4章 ブルボン改革と大反乱の背景

第5章 社会的動揺の極致：トゥパック・アマルの反乱

結 論

それでは以下、各章ごとに要点をみていこう。

第1章では、銀鉱業に規定されて展開したペルー植民地経済全般を描写している。18世紀後半のペルー副王領において鉱業は著しく伸展した。1776年に副王領全体で生産された銀の総量のうちアルトペルーにおいて生産された銀の割合は63%(このうちポトシ産の銀は副王領全体の46%を占める)に達したから、この時期においてもアルトペルーは依然として銀鉱業の中核であった。銀鉱業は他の経済部門と密接に結びついていた。特にポトシは各地からの農産物[砂糖, ぶどう酒, トウモロコシ, チューニョ(乾燥ジャガイモ), コカ等]や織物[ロバ・デ・ラ・ティエラ(土着の荒織物), 綿製品等]の一大消費市場であった。そこで、鉱業の発展は鉱山に商品を生供給するアシエンダ(大農園), オブラヘ(織物工場)で働く労働者をいっそう圧迫した。このシステムを基盤に著者は、農業・織物業・鉱業における生産の形態及び生産関係, ポトシを中心とする商業網, ラバ追い業者の実態等について分析し、副王領の人口動態, 貢納・アルカバラ等を源泉とする国庫収入の動向にも言及する。

第2章では、従来ほとんど扱われなかった18世紀初期の副王カステルフエルテ(在位1724—1736年)による植民地経済の復興政策がもたらした社会的・政治的動揺の高まりを分析している。リマ大司教モルシーリョが副

王を兼任した時期（1720—1724年）に地方教権の力が強くなり、各教区の原住民に対する司祭の政治的・経済的支配が強化された。これに続く副王カステルフェルテの政策は、人口調査を強行して貢納対象者人口の急増をはかることで国庫収入の増大をめざした。その結果発生した1730年代の諸反乱ではフォルステロ（＝共同体を離脱した原住民）やメスティソの参加が著しかった。一方、レパルトはそれを実施するコレヒドールには利益をもたらした反面、原住民を著しく圧迫したため、原住民から富を吸収するはずの司祭は不利な立場におかれた。よってコレヒドールと司祭間の闘争を煽ることになった（この聖俗両権の対立は18世紀後期においていちだんと深化を遂げる）。1730年のコチャバンバとコタバンプスでは、コレヒドールが司祭、メスティソ、カシケのみならず、クリオーリョの利益をも損ねていた。この時点で既にコレヒドールの行為（貢納、ミタ、レパルト）に対する司祭—メスティソ—原住民—クリオーリョの同盟が形成されていたとする。メスティソ主体の反抗は、この後も1739年のオルロ及び1750年のリマやワロチリにおいて継続された。そしてポトシ商業路において活躍したラバ追い、商人、銀細工師らが反乱の拡大において果たした役割は大きかったと主張する。

第3章では、レパルト（1756年に法制化）と反乱の関係が説明される。18世紀後半の鉱業の拡大過程と平行してレパルトは展開した。大量のヨーロッパ商品がペルーに流入し、市場が著しく拡張した。原住民労働力をアシエンダやオブラへに提供させ、彼らの余剰生産物を市場に吸収させる装置としてレパルトは作用した。それは、原住民は言うまでもなくメスティソのラバ追い・職人等をも対象に組み入れ、教権（司祭）やカシケを動揺させることとなった。著者は、「法制化」やレパルト自体が単独で人々を窮地に陥れたのではなく、レパルトが貢納や貢納徴収対象者人口の査定、ミタ制、教会税（十分の一税・初穂税等）、カシケの任免など様々な要因と競合したり重複しつつ、危機を煽ったと主張する。コレヒドールによって利益を損なわれた司祭の報告書は、コレヒドールへの偏見に満ちており、信

頼できない。よって、この報告書に依拠したゴルテの学説¹⁾は疑わしい。1750年代半ばから1770年代にペルー副王領全域で起きた多くの反乱を分析すると、単にレパルトとかコレヒドールだけが攻撃の目標だったのではないことがわかる。コレヒドールと教権の対立を基礎に、攻撃対象がコレヒドールやその代理人(税徴収人)、アシエンダやオブラへの所有者・監督、カシケ、司祭、鉱山主など多岐にわたっていたと著者は述べる。

第4章。商品流通に対し販売税として徴収するのがアルカバラであった。従来、穀物等の大衆消費財はアルカバラを免除されていた。また司祭や原住民はそれを支払わなくてよかった。1776年にアルカバラがつり上げられ、コチャバンバ(1774年)、ラパス(1777年)、アレキパとクスコ(1780年)における税関の設置が反撥を招き、これらの諸都市で税関への攻撃が一斉に発生する。課税対象外の商品への課税により、原住民が重大な影響を被ったことによる。1780年7月には職人層への免除が外され、また土着の織物にもアルカバラが課せられるなど、1780年の大反乱期までには植民地人の大半がアルカバラと税関によって損失を被っていた。ポトシ・ルートで輸送や商業に従事していたトゥパック・アマルもこの例外ではなかった。著者はウルバンバの反乱(1777年)、ラパスの反乱(1777年、1780年)、アレキパの税関に対する反乱(1780年)、クスコの銀細工師の反乱計画、アルカバラに対する他の諸反乱(1780年)を検討するなかで、メスティソやムラートが貢納台帳に登録されたことにもふれ、原住民をはじめクリオーリョ、メスティソ、ムラート等の多様な植民地人が抵抗運動に参加していたことを立証する。

第5章と最終章(結論)では、大反乱の再解釈が行なわれる。著者はトゥパック・アマルの反乱をホセ・ガブリエルが指揮した第一局面と、彼が逮捕された後にその一族やアルトペルーの指導者が率いた第二局面からなると捉えた。反乱に参加した100余名の被告人の裁判記録を詳細に検討・分析する。まず第一局面の組織化をめぐり、運動拡大の様相と合わせて多様な社会階層からなる指導者の構成を述べる。ポトシ商業圏との関係を基礎

にカシケ・司祭・クリオーリョの動向や親族関係、ラバ追い業等に言及し、クリオーリョとメスティソは意思決定レベルで反乱に参加していたと指摘する。そして、両局面の連続性と相違点に着眼し、参加者の社会的地位・人種・職業等の側面から検討を試みている。両者に共通して親族関係が大きなウエイトを占めていたが、大きな相違点はフリアン・アバサの反乱から明白なように第二局面ではクリオーリョの参加がほとんどみられず、反乱の担い手が全面的に原住民であったことだ。そして社会不安はアレキパに始まり、クスコとラパスに及んだと捉え、南アンデスの交易路を舞台にラバ追いや商人として活動していた中産階級や原住民が特に大きな損失を被ったと考察した。そして、1777年以降のブルボン財政改革が大反乱の最大原因であったと結論づける。反乱の主要原因をレバルトに求める近年の学説は退けられる。

III 本書が含む若干の問題点

(1) 本書を読んでまず感じることは、基本的には非原住民の動向を中心に反乱の社会経済的背景が分析・考察されており、原住民社会の機構や役職、構造全般の扱いについて不明瞭な点が目立つことだ。このことは、タルマとハウハ両地方の原住民に対する聖俗両権による諸搾取、共同体の土地収奪、カシケの任命をめぐる対立(119頁, 127-130頁)に言及しながらも、両地方から起こりセルバ(森林部)の未開原住民部族をも巻き込んで展開したファン・サントス・アタワルパの反乱(1742-1761年頃)に著者がふれなかった点(この人物の名前が「?」つきで引用文に見えるのみ、93頁)に端的にうかがえよう。

「原住民のアルカルデ」(128頁, 142頁, 146頁, 155頁)、「土着のカビルド(アルカルデとレヒドール)」(133頁, 144頁, 156頁)、「しばしば司祭は原住民のアルカルデやレヒドールにコレヒドールへの蜂起を指導するよう説得しえた」(133頁)といった箇所に関して、この「カビルド」の機

構とか「アルカルデ」・「レヒドール」の役職がいつ、いかなる状況・目的の下に出現したのか、読者は全く理解できない。こうした機構や役職がシエラ南部に広く出現したのはトゥパック・アマルの反乱終結以後のことと評者は考えている。伝統的に共同体を代表したカシケとの関係を含む著者の説明がどうしても欲しい。原住民側の指導者の存在が不鮮明なために、原住民が次々と立ち上がっていったその過程がぼやけてしまった。

こうした疑問が生じる理由は、本書では原住民の統治形態をはじめ、原住民共同体の構造それ自体の分析がなされていないからである。この分析が最初に入っておれば、より説得的であり、アンデス地域に固有な支配の特質がはっきりしてくるのではなかろうか。

(2) 第2章の冒頭で著者は、十分の一税(教会が、原則として非原住民の生産者に農畜産物の十分の一を現物納付させた税, 54頁)に圧迫される司祭の姿を描写している。十分の一税徴収人によって司祭は苦しめられる。この税が徴収される手順がわからないために読者は混乱に陥るばかりである。また、「おそらく司祭が自ら貢納を徴収し、レパルトに対して厳しく抗議しはじめたのは、レパルトを法制化しようとするカステルフエルテの政策に反撃するためだった……」(71頁)との箇所も理解に苦しむ。たとえ「シノド(sínodo, 貢納歳入のうちの教会への納付分)」(70頁)の上昇が狙いだったにしろ、司祭が貢納を徴収したという推論は、当時の原住民支配の構図から考えて、受け入れ難い。

聖俗両権にわたる植民地支配機構そのものの入念な説明が必要とされるところである。

(3) 第3章では、貢納の支払いにレパルトが追加されると原住民は自己の商業活動をいっそう拡張させたとし、レパルトはアルカバラとの関係で第二義的に捉えられている(118頁, 206頁)。著者のこの姿勢には、「レパルトがコレヒドールに対する反乱の直接理由」(123頁)とする近年の学説への対抗意識がうかがわれる(102頁, 107頁, 121—123頁, 125—126頁)。ゴルテはその著書の中でレパルト、貢納、ミタに対する原住民の負担を勞

働日に換算し、各負担の割合を74%、23%、3%と捉えている²⁾が、これに代わる見解は本書では示されていない。また割当て品の内容、規模、単価等についての説明(第11表、第12表を見ても)が乏しい。こうした点からも、レパルトに関する著者の見解がゴルテのそれを越えているとは認め難い。

さらに第3章の後半で、連綿と続く諸蜂起の描写は読者を混乱に導く心配がある。レパルトに起因する反乱の事例としてはふさわしくないものが相当含まれているように評者には見うけられるからだ。

(4) 第4章においても疑問点が目立つ。たとえば、6%に値上げされたアルカバラ徴収の責務がコレヒドールにあり、コレヒドールがクリオリョやメスティソの事業主・地主・商人の反感を買ったとの指摘(167—168頁)は興味深いけれども、説得力に欠ける。なぜなら、アルカバラの徴収におけるコレヒドールと税関の各役割分担がどうなっていたのか、また徴収されたアルカバラが国庫に納められるまでの経路が示されておらず、コレヒドールと税関吏、財務府(Cajas Reales, 8頁, 48頁)と税関(205頁の第22表に“Local Receptorías”とあるが、これが「財務府」, 「税関」のいずれに所属するのかも不明である。少なくとも1784年のインテンデンテ制導入後では、「税関」の「地方代理機関」もしくは「地方分署」ほどの意味にそれを解してよいように思う)の諸関係が掴めないからだ。1779年以降、アルカバラの適用がココヤ穀物などにも及んだとある(168頁, 170頁, 207頁)。しかし、その徴収のメカニズムは不明である(たとえば、カシケ, コレヒドール, 税関のいずれがそれを徴収したのか、見当がつかない)。この点が明らかにならない限り、税関の設置が社会的不穩の決定的要因であった(170頁, 201頁)とか、税関襲撃の様子が長々と述べられても、その真相を知ることはできない。

(5) 第5章では、フォラステーロの実態についての理解が重要であると思う(本書では、48頁, 58—59頁, 68—69頁に若干の説明がある)。特にアルトペルーの原住民人口に占めるフォラステーロの割合は60%以上と

も言われ、その出現の経緯や実情を知ることがこの地域を理解するうえで大切である。ところで、「第一局面」と異なり「第二局面」(ラパス包囲戦)ではクリオーリオの参加がほとんどみられず、反乱の担い手が主に原住民であった理由を著者は、「第一局面」(サンガララの勝利とピッチョの戦い)における原住民の急進化と混乱に求めている(251頁, 253頁, 255頁)。この点については承服できない。18世紀のペルーとアルトペルーの各原住民社会構造の相違点に深く根ざしているのではないかというのが評者の考えであって、しかもこの相違点を探究するさいに、フォラステロの存在が関係しているように思えるからである。

(6) 次に本書では、理解し難いところや年代等の誤り、難解用語が散見される。たとえば、「原住民の貢納は年に二度徴収され……6月の収穫期に2分の1 (tercio de San Juan=サン・ファンの1/3) ……他の半分はクリスマス (tercio de Navidad=クリスマスの1/3) に…」(54-55頁)とか、「クリスマスの1/3 (tercio) を徴収する……サン・ファンの1/3 (tercio de San Juan) の貢納を集める」(149頁)といった箇所だ。つまり、“tercio”の意味が不明確であって、貢納の年間徴収回数がはっきりしないのである。

年代記述の誤りだが、レパルト法制化の年「1765年」(136頁)は、「1756年」と訂正しておく。また、「1772年の王室法令でアルカバラが2%から4%に上昇」(163頁, 167頁)とあるが、1756年のレパルト法制化時点で既に「4%」が徴収されており、「1772年」との時期設定には賛成できない。

また、“aypos”(106頁)、“recochicos”(146頁)などの難解用語については説明がほしいところである(巻末の「用語解説」にも出ていない)。

最後になったが、征服以降スペインによって導入された市場経済の流れにおいて18世紀のアンデス地域がいかなる状況下にあったかという問題は、トゥパック・アマルの反乱を考えるうえできわめて重要な視座である。ブルボン財政改革を軌軸にこの点を深く追求した本書は若干の問題点を含んではいるものの、レパルトの実態解明から大反乱の背景を説明したゴルテラの著書と並んで、今後も読み継がれるべき画期的な労作の一つと言え

よう。また、ひとえにアンデス地域のみならず他のラテンアメリカ地域、ひいては第三世界全般の民衆の抵抗運動を理解するうえでも本書は、問題解明への糸口を与えてくれるように思う。

注

- 1) Jürgen Golte, *Repartos y rebeliones, Túpac Amaru y las contradicciones de la economía colonial* (Lima : IEP, 1980). 参照。
- 2) *Ibid.*, p. 16.